

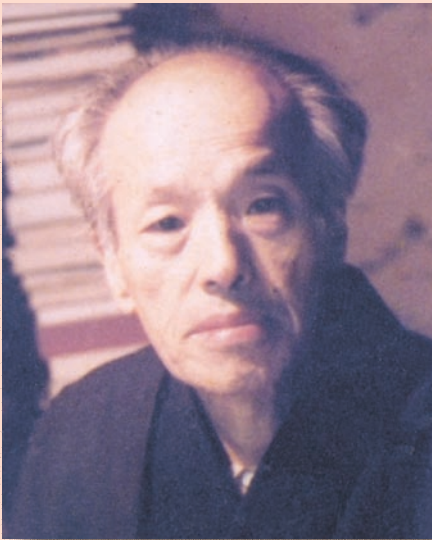
小説

ならさき

つとむ

萩市

(1901～1978)



【著作】

『神聖な裸婦』（昭和5・新潮社）
『相川マユミといふ女』（昭和5・新潮社）
『作家の舞台裏』（昭和45・読売新聞社）ほか

榎崎勤は、昭和初年代の新興芸術派の作家であり、また大正末年から昭和二十年（一九四五）までの長きに亘って、雑誌『新潮』の実務一切を取り仕切った編集者である。『新潮』は明治三十七年（一九〇四）に創刊され、現在まで命脈を保つ新潮社発行の文芸雑誌であるが、榎崎勤が編集に携わっていた時期は、ちょうどプロレタリア文学の勢力が文壇を席捲した時期から、満州事変以降、自由な言論活動や出版が困難となっていた時期に該当している。このような激動する社会状況において榎崎勤は、昭和文学史にとって重要な小説発表の（場）のひとつである『新潮』を、ほとんど独力で編集し、守り続けた。

もちろん小説家としての榎崎勤という側面も見逃すことができない。榎崎勤が所属していた新潮社は、新興芸術派叢書という小説シリーズを刊行していた版元でもあり、新興芸術派の拠点となった出版社だった。一般に、新興芸術派は、プロレタリア文学の台頭に抗して結成され、芸術の自律性をめざしつつ都市のモダニズム文化をモチーフとした文学グループであるとされるが、同時に、たとえば私小説作家である嘉村礒多を含むような幅の広さも持ち合わせていた。榎崎勤は、新潮社の新興芸術派叢書から、『神聖な裸婦』（昭和五年（一九三〇）四月）『相川マユミといふ女』（同十月）という二冊の小説集を刊行している。

また戦後、新潮社から読売新聞社へと移り、同社を退職したあとで榎崎勤が上梓した回想録『作家の舞台裏』（昭和四十五年（一九七〇））は、昭和期出版ジャーナリズム史の一齣を知るうえで、欠かすことのできない重要な文献であり、また昭和文学史におけるあだ花と評価されることの多かった新興芸術派の文学運動を再評価しようとする、当事者による貴重な証言でもある。同書からは、龍膽寺雄・吉行エイスケ・久野豊彦・浅原六朗・岡田三郎といった、今日ではほとんど読み直される機会のない新興芸術派の作家達を忘れてはならない、という、榎崎勤の強いメッセー

なお、榎崎勤についての本格的評伝としては、大村彦次郎著『ある文藝編集者の一生』（筑摩書房、平成十四年（二〇〇二）九月）があり、同書は、榎崎勤の文学活動の全貌を知るための格好の手引書となっている。

（文・加藤禎行）

【参考文献】『日本近代文学大事典 第二巻』（日本近代文学館・講談社）
『ある文藝編集者の一生』（大村彦次郎・筑摩書房）
『作家の舞台裏―編集者から見た昭和文壇史』（読売新聞社）

榎崎 勤 年譜

（提供・加藤禎行）

明治34（一九〇二）年

大正3（一九一四）年

大正8（一九一九）年

大正9（一九二〇）年

大正14（一九二五）年

大正15（一九二六）年

昭和3（一九二八）年

昭和4（一九二九）年

昭和5（一九三〇）年

昭和7（一九三二）年

昭和15（一九四〇）年

昭和19（一九四四）年

昭和20（一九四五）年

昭和21（一九四六）年

昭和24（一九四九）年

昭和26（一九五〇）年

昭和31（一九五六）年

昭和45（一九七〇）年

昭和47（一九七二）年

昭和53（一九七八）年

11月7日、山口県萩市東田町に齒科医榎崎東陽、母ちえの次男として生まれる。父東陽は日露戦争に軍医として従軍、朝鮮に留まり京城市内南山町で開業する。勤も幼少期を京城で送る。

4月、京城中学に入学。中学時代、文学熱の高まりを迎える。新潮社の投書雑誌『文章倶楽部』に小品を投稿し入選する。

3月、京城中学を卒業。同志社大学に入学するが入学できず、京都の兄東策のもとに身を寄せる。夏、大阪朝日新聞社による朝日新聞創刊四十周年記念の懸賞小説に取り組みが落選。この時の一等入選者は「地の果まで」を書いた吉屋信子。

4月、同志社大学に入学。両親が、京城から東京赤坂に移り、齒科医院開業。肺湿潤を患い同志社大学を退学、東京の両親のもとで療養生活を送る。

5月、新潮社に入社。中根駒十郎のもとで出版部員として勤務。春、中村武羅夫のもとで雑誌『新潮』編集に従事するようになる。『新潮』10月号「新人創作特輯号」で、浅見淵・尾崎一雄・林房雄・藤沢恒夫・舟橋聖一ら、11人の新人作家発掘を行う。

雑誌『不同調』に「ひゆうねらる・まあち」（2月号）、「最後の晩餐」（6月号）、「脳貧血と歎歎」（12月号）が掲載される。

4月、雑誌『近代生活』が創刊され、同人となる。同人は中村武羅夫・岡田三郎・浅原六朗・平林初之輔・大宅壮一・勝本清一郎・龍膽寺雄・吉行エイスケ・嘉村礒多ら。「上層の風」（5月号）、「明日へ遊ぶ」（9月号）を掲載。10月、「十三人倶楽部」発足。

『新潮』新年号に「白い水族館」が掲載される。4月13日、「新興芸術派倶楽部」第一回総会が開かれ参加。同月、新興芸術派叢書の一冊として『神聖な裸婦』（新潮社）刊行。6月、「十三人倶楽部創作集I」（新潮社）刊行「R・共和国」を掲載。10月、新興芸術派叢書の一冊として『相川マユミといふ女』（新潮社）刊行。

4月、二歳年下の山下寿賀子と結婚。5月、徳田秋聲を囲む「あらくれ会」発足、会員となる。7月、雑誌『近代生活』終刊。新興芸術派はこれ以後、低調となる。

12月、『蘆』（青木書店）刊行。

夏、千葉県野田町に疎開。

3月号をもって『新潮』休刊。5月、新潮社空襲被害を受け、休職となる。

6月、新潮社退社。9月、読売新聞社に嘱託として入社。

10月、雑誌『読売評論』が創刊され、その編集長となる。

6月、『読売評論』終刊。以後、図書編集部部長となる。

読売新聞社退職。

11月、文壇回想録『作家の舞台裏―一編集者のみた昭和文壇史』（読売新聞社）刊行。

4月、開通直後の山陽新幹線に乗り、中国地方を旅行。萩市善福寺で墓参。

12月1日、死去。戒名は文翁勤成居士。両親の眠る市ヶ谷八幡町洞雲寺と祖先の菩提寺である、萩市川島の善福寺に分骨される。

嘉村が病床についていたのは、昭和八年の春さきではなかったかとおもう。新潮社からほど近い、おなじ矢来町に家があったので、ひまを見ては見舞いに出かけたが、誰にも逢いがらなかった。その気持ちをくんでいる、ちとせさんも玄関さきで、そのおりおりの病状を口すくなく伝えるだけであった。わたくしはかかりつけの内科の成川医師が呼吸器専門なので、とくに診察してもらうようにすすめたりした。

夏の終わりごろ、長い病臥のために床ずれがひどく、寝返りをつつことも容易でない、嘉村はかすれた声で訴えるようにいった。雲の低く垂れた薄ら寒い初冬の昼すぎ、ちとせ夫人が、息を弾ませてきて、「嘉村が、たったいま息を引きとりました」といった。すぐ銀座裏に居をかまえていた中村（引用者註：中村武羅夫）に連絡をとり、嘉村の郷里の山口県仁保村の両親と、当時、霞ヶ浦航空隊に勤務していた、海軍少佐の義弟のもとへ電報を打ちにいったり、成川医師に死亡診断書をもらいにいったりした。成川医師の話では、左右の肺は、すっかり侵かされていて、いまままで生きながらえていたのは、精神力だ、ということであった。

その夜は、中村、岡田三郎、浅原六朗氏らと、お通夜をした。深夜になって眠くなる。しんしんと冷えてくる。火鉢にかんかん火をおこして、花札を弄しながら夜を明かした。線香が消えるころ、誰ということはなく、二階をおりていき、嘉村の枕頭の線香立てに新しく線香を立てた。そのたびに、遺骸に沿うようにして仮睡しているちとせ夫人は、おどろいたように眼をあげ、「すみません……」というのだった。

「三人の私小説作家」（『作家の舞台裏』昭和45年11月より）